

## シンポジウム開会のご挨拶と趣旨

(永田)

こんにちは、未来の図書館 研究所の永田と申します。第2回未来の図書館 研究所シンポジウムを始めるにあたって、ご挨拶を申し上げます。

皆さま、大変お忙しいなか、ご参集いただきましてありがとうございます。今年度もこの企画が実施できるのは、まずは皆さまのご参集のおかげであり、またお二方が発言者としてお受けいただいたことによります。本日もよろしくご協力のほどお願いいたします。

私どもは、未来の図書館を構想するにあたって、今現在の図書館がどんな機能を果たしているかをきちんとおさえ議論しようということで、第1回の昨年度は、和歌山大学の渡部幹雄先生と、カーリルの吉本龍司さんにご見識を披瀝していただき、種々の観点について議論しました(その議論の内容は、研究所のWebサイトにも載っているのですが、印刷物にもいたしまして、皆さまのお手元に配布いたしました『未来の図書館 研究所 調査・研究レポート2017』に掲載してあります。お目通しをいただければありがたいと存じます)。それに続きまして今回は、昨年の議論でも注目されていましたコミュニティの観点から図書館を考えてゆきたいということで、「図書館とソーシャルイノベーション」というテーマにいたしました。

ソーシャルイノベーションというのは、ときおりは耳にはするけど、あまり普段使わない概念かと思えます。社会を変革する、社会をよりよくしてゆく動きという意味です。ベンジャミン・フランクリン(Benjamin Franklin)が図書館カンパニーを設置する際に表明した趣旨を思いおこしてみてください。図書館というのは、人々の読書や話し合いを通じてコミュニティをよくしてゆこうという仕掛けです。そのように、ソーシャルイノベーションは図書館と割となじむものだと思います。

そこでこの類似性に着目し、現在ソーシャルイノベーションといわれている活動から、図書館にとっても有用な示唆が得られるのではないかと考えました。また、ソーシャルイノベーションが、後ほど説明いたしますように、営利、非営利という枠を超えて展開されています。図書館はむしろ公共の施設ですが、その運営については現在難しい状況にあります。ソーシャルイノベーション活動のこの側面が図書館の現状を打開するブレークスルーを与えてくれるかもしれません。

そんなことを思い浮かべつつ、今回これを取り上げましたが、その直接のきっかけとなったのは、一つは今年の1月、アトランタであったALA 冬季大会での図書館の未来を議論するシンポジウムという催しでした。そこで「図書館とソーシャルイノベーション」がテーマとして取り上げられました。シンポジウムでは、図書館との関係のみを議論するものではなかったものの、ソーシャルイノベーションの課題は図書館にとっても取り上げなくてはならないのだと、出席者は了解できたようです。そして二つ目のきっかけは、なによりも国内の、太田剛さんの図書館と地域をむすぶ協議会です。図書館を通じて社会を変えようと標榜している活動です。太田さんは存じ上げていましたが、ソーシャルイノベーションを掲げた図書館の活動で、再度太田さんに遭遇したようでした。それに、皆さんの図書館でもやはり、ソーシャルイノベーションと同じような考え方でもって、いろいろイベントなり、サービスなりを展開しているということもありましようから、この議論をこの時点でやっておきたいと考えるに至りました。

このシンポジウムでは、図書館をめぐるソーシャルイノベーションというアイデア、あるいは、その実践がどのように展開されているかを確認し、さらに今後どのように進められるかを考えたいと思いま

す。端的にいいますと、図書館をベースにコミュニティを革新できるかが、今回のシンポジウムの問題意識です。

以上が今回のシンポジウムのテーマへ向けてのいきさつでございます。これを、私の所長としてのあいさつにかえたいと思います。

そこで早速ですが、シンポジウムのプログラムに入ってゆきたいと思います。私はコーディネーターという立場でありまして、まずはシンポジウムの全体を説明させていただきます。ちょっと座らせていただきます。

先ほどは非常にゆるく、ソーシャルイノベーションとは社会をよくしてゆくものだと申し上げましたが、もう少し言葉を添えておかないと話が進まないかと思います。お二方の発表に入る前に、あと10分程度いただいて、私のほうから「ソーシャルイノベーションとは」について、もう少し説明させていただきます。次いで、お二方からのご発表を、それぞれ45分、35分程度お願いしたいと思います。

発表いただくお一方は、皆さまからみて左手の太田剛さんです。太田さんには、「図書館と地域をむすぶ協議会」でのさまざまな試みや実績を踏まえて、図書館とソーシャルイノベーションを語っていただきます。もうお一方は、右側の筑波大学図書館情報メディア研究科の宇陀則彦さんです。宇陀さんから、ソーシャルイノベーションを展開するには、人々が意見を交わし、価値観の共有や新たな関係をつくり上げる場が必要だということで、そうした場についてフューチャーセンターを参照しつつ、図書館のあり方を語っていただくことになっております。

ご発表は15:10あたりで終わると思いますので、そのあと20分程度休憩いただき、それから15:30から1時間、ディスカッションをしたいと思います。そんな設定であります。

さて、冒頭にも申しましたように、皆さんは、ソーシャルイノベーションという言葉を目にされていると思いますが、必ずしも人口に膾炙しているわけではなく、ときに、この言葉はバズワードだともいわれ、もっともらしいけど、実際には定義や意味があいまいだと指摘されます。

ソーシャルイノベーションは、社会的な革新、社会を変える活動であると申しましたが、例えば、モバイル機器、皆さんがおもちのスマホなんかはですね、この数年の間に本当に社会を変えたと思います。そしてその技術的な便宜性だけではなくて、例えば人と人のコミュニケーションの関係についてもわれわれの社会関係のあり方をずいぶん変えたと思います。しかしこれは製品のイノベーションであり、いわゆるビジネスイノベーションです。ビジネスイノベーションといわれるものがなにかというと、収益を得ることが前提であり、収益を求めてそういった技術開発がなされ、それが世の中に普及して、その結果として社会が変わったというわけであります。これはソーシャルイノベーションとは申しません。

ソーシャルイノベーションというのは、社会的なニーズに合致するという目的に動機づけられたもので、収益を得ることは組織の存続としては当然ですし、収益が多いほうが事業は拡大してさらに社会の変革ができるわけですから重要なのですけれども、収益だけが中心的課題、中心的動機ではないというものであります。そのところ、なかなか難しいので、ソーシャルイノベーションを実際に展開しているものにはどんなものがあるかを具体例でみておきましょう。

図1のスライドにあげましたように、例えばオープンソースのソフトウェアです。ご存知のLinuxとか、各種各様、実際ものすごい数に上ると思います。また、自然食品の普及活動、ビオ（日本ではオー

ガニックといいます)といった、自然食品の普及販売活動もそうです。次に、開発途上国における人々の生活が維持できるように、生産物を買叩くくじやなくて必要な経費はきちんと払ってゆこうというフェアトレードという活動があります。あるいは、人々がきちんと状況を理解できるような教育モデルを提供する活動もそうです。オープンソース、フェアトレードあたりは市場で、つまり企業的な形で展開されていると思います。教育的なモデルは特に学術的な世界などと共に展開されています。

企業的な形で有名なものに、マイクロクレジットがあります。商業銀行あたりから融資を得られないような人々を対象とする、非常に少額の融資をするものです。バングラデシュでつくられたグラミン銀行は成功をおさめ、それをつくった方はノーベル平和賞をもらいましたね。このビル(図2)はグラミンググループのビルで、グラミン銀行もこのビルに入っていますが、この写真で読み取っていただきたいことは、この種の活動でも規模を大きくすることの大切さです。規模が大きくなれば、それだけ社会改革が大きくなります。



図1 ソーシャルイノベーションとは、



図2 グラミンググループ社屋

さらに、ホームレスのための雑誌として、皆さまも街角で『ビッグイシュー』という雑誌を売っているのをご存知かと思いますが、その販売収益はかれらの生活支援にあてられています。それからさまざまな公衆衛生の活動もあります。ここであげられた例をみると、多くのものが企業的な形でソーシャルイノベーションは展開されています。

図1のスライド中の左は「いんどり」(<http://www.irodori.co.jp/>)という会社のものです。皆さんよくご存知かと思いますが、徳島県の上勝町の「葉っぱビジネス」、町の高齢者たちが、料理に添える葉っぱを取ってきて、その葉っぱをうまく売って、高齢者たちの生きがいや、健康管理にも有用な効果を得たという事業です。

あと2分しかありませんが、もう一点。ソーシャルイノベーションはいつごろからいわれてきたか。思想的にさかのぼれば、ロバート・オーウェン(Robert Owen)の運動にもつながるでしょうが、これが表面に出てきたのはだいたい世紀が変わるころ、21世紀になってからといわれています。なぜそのようなタイミングに出てきたかという、われわれが抱える問題が非常に難しくなってきたことが理由です。

20世紀末の頃から、一般に企業が合理的というか、非常にスリムな経営を始めまして、そうしますと雇用問題に響き、雇用不安が出てきたり、あるいは会社もスリムになり余裕がもてなくなって、組織内外で共同して事業を展開するというような雰囲気がなくなってきました。そういう状況は、国や地方というような行政サイドでも同じで、いわゆる新自由主義的な政策が選好され、行政改革の推進のような話になります。なるだけ経費を削減するところにゆきます。もちろん、このこと自体には有効性もあり、インフレーションの抑制とか、生産性の向上には成功したと思います。しかし小さな政府を目指すなかでは、健康、文化、福祉、環境というような予算が削減され、対応が遅れがちになりました。

われわれの図書館予算の削減もその一環だと思います。そして、貧困や就労の問題が顕在化し、以前は相互扶助的な役割を果たしていた地域コミュニティが縮退してゆくというような社会状況になってきました。こういう社会状況が広がり、社会的課題が深刻になってきたということで、世紀の変わり目のころより、公共性でもなく、利潤追及でもない新しい行動原理が出現してきたのです。社会的価値を追求してゆくことにより、社会的課題の解決を図ろうという動きです。これが、ソーシャルイノベーションです。ですから、ソーシャルイノベーションという動きはかなり目新しく、最近になって社会的に認知されるようになってきたものです。

まずは状況が厳しくなって、現状変更のニーズが出てくるというのが一つあり、また、変更するということは、今までのアイデアとは違ったものでなくてはならないという点もあります。新しいアイデア、あるいは、今までのシステムと違ったものでなくてはならないというところもみえます。さらにもう一つ、問題は複雑だということですね、いろんな問題につながっているということです。例えば地球温暖化の問題でも、ただ石炭の使用を中止してしまえば解決できるというものではない。さまざまなところに関連している、それは経済に関連するだけでなく、われわれのひとりひとりの生活にも、環境破壊の問題が関係しています。かなり広い視野でこの問題を考えなければいけないということがあります。このような課題、あるいは状況を踏まえて、ソーシャルイノベーションというのは、「公共性でもなく、利潤追求でもない新たな行動原理と社会的価値を追求してゆくことにより、社会的課題の解決を図ろうとする動き」だと規定しておきたいと思います。

少し時間が超過しましたが、早速、発言者のほうにバトンをタッチしたいと思います。それでは、太田先生よろしくお願ひいたします。

---